

---

# 夏と浴衣と神話

穴熊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏と浴衣と神話

### 【Nコード】

N7537S

### 【作者名】

穴熊

### 【あらすじ】

祭り。

神社に待ち人のいる先輩と、私の会話。

「神道が実はマナイズムだったって話、信じる？」

先輩はいつも唐突に話し始める。

今はお祭りの最中で、淡い光を持ったぼんぼりを下げる細い縄が赤い赤い太鼓台から伸びていて、先輩はそれよりも鮮やかな赤い浴衣を着て、手には金魚袋を提げて。

それなのに先輩はそういう話をする。

雑踏の中で、か細い先輩の声を聞く努力は解れたセーターの毛玉に戻すよう注意深く手繰るのに似て、そしてそれを蜘蛛の糸のように大事にする自分に気付いて、諦めたくて。

「いえ、神道は知っていますが、その重要なところを知りません。どういう事なんです？」

諦めなくて。

「日本には沢山の 八百万の神様がいた。だから今まで神道はアニミズムとして解釈されてきた、だって一杯居すぎるからね」

「そういうものなんですか？」

「そうだよ。そんなに沢山いるなら万物に靈魂が宿る、って思わないと説明がつかないから」

「そう思いたがる人もいるんですね」

半分に折ったチューチューアイスの味が水っぽくなってきた。

「話、聞いてる？」

「聞いてますよ。色んな神様がいるって話でしょ？」

「ちーがーう。私の話はこれからなの。今は、神道の、基本設定を、話してたの」

子供っぽい先輩はもう半分のアイスを食べ終わって、別の獲物を探していた。

先輩の赤い目が見初めたのは小学生ぐらいの男の子が持ったブルーハワイのかき氷。

「あの子が食べてるの、なんの味？ 美味しそう」

かき氷の色も、先輩の目には白と黒に映る。だから、今まで、私が側にいた。

「メロンですよ」

「本当？ 私の好きなので良かった、買おうぜ」

「ええ、買いましょう？ 並びますけど」

「……手」

恥ずかしそうに先輩は手を差し出す。白魚のようなその手は温かい、雪のように白いその髪に周囲の視線はとても冷たい。

「冷たいね、手」

「夏ですから」

「そうね。夏だね、って関係なくない？」

そしてまた、喋り出す。

自分の声と誰かの手を握る事だけが周囲の視線を阻む術だと心に刻みつけられた人だから、意味もないような事を喋り続ける。

不安を掃き出すように喋り続ける。

「それで、昔は物体の方に才があつて、それを動かすという事を能という一字で現した」

「今と随分違うんですね」

「そうなんだよ。それで、えっと……？」

「それがマナイズムとどう結びつくんです？」

「ほら、それが、それを取り込むって言う形になって」

「才能になつたんですか？」

「そう。その通り！」

「でも、言葉は時間を経ては変わるでしょう？ この事が宗教と関係ないとは言いませんが、根底を示す事例とも思えません」

「それは、ほら」

「明日、彼に学校で聞くからいいですよ、もう」

先輩は顔を鮮やかに染めた。とても白い肌を持った人なので、首筋まで熱が回ってるのが僅かな電光の中でもよく分かる。

その結い上げた髪も、その首筋も、まだ彼には見せていないのでしょう？

「か、彼って誰だよ！」

「先輩のクラスメイト。最近、話をしているのをよく見ますよ」

「そんなこ、こと」

「なんで知ってるのか？ それは、先輩がお弁当をいつも忘れるからいけないんですよ」

「あ、ああ……いつも、すまんね」

「いいえ、先輩は手の掛かる子ですから」

「それ、私が昔言ってた言葉じゃない。あんたにそう言われる日が、来ちゃったか」

私は好きな人と同じ言葉を喋る心地よさと楽しさを知っている。だから、先輩が彼の言葉を、興味のなかった宗教を調べ始めたのを、その理由も感じられる。

「メロン一つと、ブルーハワイ一つください」

私は声の小さい先輩の代わりに。

「ブルーハワイ食べるの？ 不味いって言うってたじゃん」

「そうでしたっけ？」

「そうだよ。それに、かき氷も一人では食べきれないって、いつも二人で一つを」

「いいえ、それはもう過去の話です」

「そう？」

「そうです」

「反抗期？」

「むしろ黎明期」

「なんの？」

「なんでしょっ」

私は神社で彼が一人で行っている事を知っている。それを伝えてくれと頼まれたからだ。

「ねえ、先輩」

太鼓の音が地面を響かせる、私の鼓動は強く強く増していく。手先が氷水に浸けたように冷えていく。同じように脳も冷えていく。

「やっぱり、マナイズムの事が、今知りたくなりました」

「えっ、いや、今は良いんじゃないかな？ はは、ほら、かき氷」

自分の都合の良い事を思ったがる人が多いのを、私と先輩は一緒に実感してきた。

この想いが、思春期に特有のものだと、思いたい人は思えばいい。神社に、彼がいます」

それでも私はあなたを

「行ってきたは？ 私も、かき氷は一人で食べれますし、先輩もそうでしょう？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7537s/>

---

夏と浴衣と神話

2011年10月9日01時01分発行